

OPINION オピニオン・スライス SLICE

ミステリ研出身にして 現代本格の重鎮

ミステリ小説作家

綾辻行人さん



YUKITO AYATSUJI

乱歩に始まる

— 江戸川乱歩がお好きだったんですね。

僕らの世代はみんな読んでいましたよね。小学校の中学年から高学年くらいで「少年探偵団」を。僕も、最初に読んだ推理小説が乱歩、そしてルブランだったんです。『妖怪博士』と『奇巖城』。

— しかし好きな名探偵は、クイーン、金田一、そして御手洗潔がベスト3ですね。

最近のアンケート回答ですね。

— 普通は、明智小五郎がシャーロック・ホームズだと思えますが。

小学生のときはホームズ派じゃなくてルパン派だったんです。明智も好きでしたけれども、6年のときにエラリー・クイーンの国名シリーズを読んで、すっかり魅了されました。何てかっていいんだろう、と。中学生のこ

ろは、尊敬する人物はと訊かれたら「エラリー・クイーンです」と答えてましたね。あ、これは作中の探偵クイーンじゃなくて作者クイーンのほうですが。

京大ミステリ研に入って

— 京大に入られてミステリ研の影響はいかがですか。

それはもう、甚大です。早くから自分でもミステリの創作を始めていたんですが、高校時代は怪奇幻想小説的なものを好んで書いていました。本当はミステリを書きたかったんだけど、自分には社会的な常識もないし、ちょっとまだ難しいなと思えて。そのころの習作が結局、今の作風の糧になってはいるんですけどね。でも、京大ミステリ研に入らなかったら、いつまでもミステリじゃなくて怪奇幻想ものを書いていたかもしれない。いわゆる本格ミステリを書けるようになったのは、ミステリ研で受けた刺激のおかげです。

— 京大ミステリ研に入る前のイメージと入ってからのイメージは違いますか。

正式名称が「京都大学推理小説研究会」ですから、もっと堅苦しい、アカデミックな「研究」をしているイメージがありましたね。

— しかし我々は「犯人当て」が大好きで、やたら議論をしていた。

「やったね」と思いました。当時、ミステリ作家になるのが人生の目標だったので、一も二もなくミステリ研には入会したわけですが、創作が盛んな会だと知って、我が意を得たり、みたいな。僕も「犯人当て」はけっこう書きましたね。

トリックとマジック

— 本格ミステリをつくる手法として、トリックは出尽くしていても、そこに味付けすることで幾らでも書けるという感じですか。

奇術と同じですね。もともと少しはマジックをかじっていたんですけど、1回生の合宿で大川さんに「トライアンフ^{注1}」を見せていただいて、衝撃を受けて。それでひとしきりマジックにも熱中することになりました。マジックのトリックも、原理という意味ではすでに出尽くしたと言われていますが、それでも毎年新作が発表されますよね。手順が工夫されていたり演出が独特だったりということでも、新作として認められる世界です。それを知っているものだから、ミステリも同じことだろうという認識があります。同じ原理であっても見せ方次第で効果が大きく変わる。それと、僕がデビューした当時は今ほど叙述トリックが一般的ではなかったので、この方向でまだいろいろできるんじゃないか、という思いもありました。

— 綾辻さんのデビュー時、叙述トリックが多いという評もありましたが、私は非常にうれしかったです。

僕は「ナイト捜し」派だったので（笑）。「デビルデビル^{注3}」も好きですけど、そのあたり自分の中でも微妙なんですね。クイーンシンパであるくせに、クリスティの大膽な騙し討ちみたいな仕掛けも大好き、という両刀遣いだったので、それが結果として独自の作風に繋がった気がします。また、ミステリ研では巽^{注4}さんにもたいへんお世話になりました。お会いするたびにミステリや創作の話ばかりしていて、的確な意見やアドバイスもいただきました。ただ、僕が学部生のころは大真面目にミステリを語るのは気恥ずかしい、という空気があったんです。そんなところへ小野^{注5}さんが入ってきて、さらに法月、我孫子^{注7}が入ってきて、一気に士気が上がった感じでした。

自己作品について

— 「館」シリーズ^{注8}の第10作というのは結構プレッシャーではないですか。

第7作の「暗黒館」を書ききって、あれでもう終わってもいいか、という気持ちもあったんです。でも、すでに全10作を公言していたので、第8作、9作と続けてきて、あと1作というところまで来たらちょっと気が楽になりました。このまま書かずに死んでも、「残念だったな」と言われて……。

— 遺言で「京大ミステリ研のボックスのどこかをあけよ」とか。

書いてないですよ、そんな遺言（笑）。このまま死んじゃったとしても、「残念だったな。最後はどんな1作だったんだろう」と言われて、それなりに盛り上がって余韻が残るそうじゃないですか。

— 書きかけがあったらおもしろいですね。第10作の書きかけらしい「館」が残っていて、後輩作家がそこから推理する。

いやいや。アイデアはまあ、いくつもあるんですが。

— 「新本格」と呼ばれることはどうですか。

最初はちょっと違和感があったんです。近年はもう、「新」じゃなくて「現代本格」でいいだろうと思ったり。ただ、「新本格」はもう日本のミステリ史を語るときのタームとして定着しているので、そう呼ばれ続けるのもいいかと。

— 自己作品のランキングは。

ときどきの気分で変わります。

— そういうものですか。

変わりますね。今だと、「館」シリーズでは『暗黒館』でしょうか。非常に苦労して書き上げた作品なので、思い入れが強いです。全体だと、『Another』はかなり気に入っています。

— 「Another」は、僕は一番綾辻さんらしい傑作だと思います。

身近な弁護士へ

— 弁護士に対するイメージとか弁護士について思うことはどんな感じですか。

弁護士といえば僕の場合まず、「ミステリ研の先輩」というイメージなんです（笑）。実は僕も、高校時代の途中までは法学部志望で、将来は司法試験を受けて弁護士か検事に、と思っていたんです。ミステリ好きが高じて、子どものころはまず探偵になりたいと思ったんですね。でも、探偵という職業は日本だとなかなか小説の中のように成



立しないと知って、じゃあ弁護士か検事かなと（笑）。それで早々と六法全書を買ってきたりして……と、そんな時期もあったんですが、途中で志望を変えて、教育学部で社会学をやることにしたという。ですから、弁護士という、個人的にはまず、名探偵のような活躍をする刑事弁護士というイメージがあったわけですが。それはさておき、最近には弁護士さんたちも大変そうだなと。制度改革があって人数が増えて、職業としての弁護士を取り巻く状況もずいぶん変わってきたんだな、という認識はあります。

一般人が法律を扱うのは非常に難しいことだから、弁護士がもっと僕たちの身近な存在になってほしいという希望は強くありますね。もっと気軽に相談に行けるような。最近TVのCMなどでもしきりにアピールされていますが、やはりまだ敷居の高いイメージがありますね。ホームドクターみたいな感じで、我が家の弁護士はこの人、と多くの市民が言えるような存在にこれからなっていってほしい、というか、なっていくんだろうなと思っています。

- 注1 プロフェッサーと呼ばれるダイバーノンの傑作マジックの一つ。
 注2 『綾辻行人と有栖川有栖のミステリジョッキー②』所収。
 注3 松田一郎作。いわゆるがちがちの本格ミステリ。作者は現在は検察官。
 注4 巽昌章氏のこと。現在は大阪弁護士会所属弁護士。代表作『論理の蜘蛛の巣の中で』（評論集）
 注5 小野不由美氏のこと。代表作は『屍鬼』他多数。
 注6 法月綸太郎氏のこと。代表作は『都市伝説パズル』他多数。
 注7 我孫子武丸氏のこと。代表作は『殺戮に至る病』他多数。
 注8 綾辻氏のデビュー作は『十角館の殺人』。以後、『館』のつく作品が人気シリーズとなり、現在9作目まで発行されている。

—— 京大ミステリ研は、作家以外に法律家がたくさん出ているという日本で希有なサークルなんですよな。

はい、なかなかすごいサークルだと思いますよ。

今後の予定

—— 今後の作品、これからの予定はいかがですか。

『Another』は4部作の構想があって、その第3作に当たる『Another 2001』を今、月刊誌に連載中です。『Another エピソードS』という外伝的な第2作がすでに出ていますが、『2001』はいわば正統な「続編」で、ちょうどNYの同時多発テロがあった年の話なんですけど、その年の夜見山での〈災厄〉を描く物語になります。完成まではまだ2年くらいかかるかな。長編はどうしても時間がかかるので、体力勝負ですね。当面それがメインの仕事ですが、50代のうちには「館」シリーズの第10作を書けなければ、と思っています。

—— 綾辻さんは日本のミステリ史に残る活躍をされているとつくづく思います。そこに京大ミステリ研がちょっとばかりでも役に立ったらとあれば非常にうれしいです。

ミステリ研は僕のルーツみたいなものですから。それはみんなそうですよ。小野さんにしても法月さんにしても、みんな。

—— そう言っていただけるとありがたいです。ありがとうございました。

[2015年2月16日・京大ミステリ研ボックス内にて]
 (interviewer: 大川一夫 / Photo: 武田真実)